

1 研究内容1 目標と評価の一体化

第19次研究2年次の重点：「単元目標の明確化」「目標と評価の位置付け」

	成 果	課 題
研究員授業 小4 社会科	<ul style="list-style-type: none"> ・単元目標の明確化、評価規準の具体化を行うことにより、授業者、児童にとって学習のゴールイメージが鮮明になった。 ・目標は「学習指導要領の目標と内容」と「実際に行うことのできる学習活動」を組み合わせることにより明確化される。また評価規準は、学習活動のまとまりで区切りを付けたり、児童の実態を加味したりすることで具体化が図られた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業者が行う評価規準の具体化の過程を分かりやすく示すことができなかった。
協力校授業 中2 数学科		<ul style="list-style-type: none"> ・授業を展開していく上で、教師が具体化した評価規準を、どのように授業で活用していくことが生徒の学習改善に結びつくのかを立証することが難しかった。
協力校授業 小4 算数科		
研究員授業 中1 外国語科		
第19次研究 2年次の総括	<ul style="list-style-type: none"> ・目標や評価規準を、実際に活動する児童生徒の姿で具体的に設定することは、教師が授業づくりにおいて指導事項を明確にすることや手立てを準備することに効果的である。また、児童生徒が目指す学習の到達点を共有することに効果的である。 ・評価規準の具体化を授業者が行いやすくなるように、指導案上で「評価規準の設定における具体化の過程」を図化して示すことができた。一方で、授業を進めていく中で、設定した評価規準を、教師が効率的かつ効果的に活用し、授業改善や生徒の学習改善につなげていくことに課題が残った。 	

2 研究内容2 指導計画・評価計画

第19次研究2年次の重点：「単元構成の工夫」「1単位時間の学習過程」「形成的な評価」

	成 果	課 題
研究員授業 小4 社会科	<ul style="list-style-type: none"> ・ 指導計画について、単元前半での自由進度学習及び、単元中盤でのミニテストによる自己省察が、単元後半での体験学習への目的意識の高まりにつながり、そこでの学びが単元のまとめに結び付いている児童が多く見られた。 ・ 評価計画と形成的な評価の充実については、本時の様子からも授業者が的確に児童の実態を把握し、必要な手立てを講じていたため、概ねよかったといえる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個々のミニテストの結果がその後の学習にどのように影響したのかが、不明瞭であった。 ・ 形成的な評価の充実に関わって、児童が自らの学習状況を数値(%)で記述する形をとった。個々の感覚が優先された数値となっており、自己評価の精度を十分に高められなかった。
協力校授業 中2 数学科	<ul style="list-style-type: none"> ・ 主に形成的な評価と関連して、「知識及び技能」の定着を図るために実施した Form での取組は、教師だけでなく、生徒自身にとっても自らの学習状況を把握できる効果的な手立てとなっていた。 	
協力校授業 小4 算数科	<ul style="list-style-type: none"> ・ 中間評価は、自分の学習を振り返り、改善を図ることができる手立てとして有効であった。中間評価を通して、児童同士で相談し、前半では気付かなかった間違いに気付くことができていた。 ・ 「問題づくり」という活動は、解答を作ることや他者に問題を出題するという相手意識が生まれることで、問題を作成する児童自身のスキルを求められることとなり、資質・能力の高まりにつながる効果的な活動だった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 単元構成として、問題作りという活動を一貫して行うとよかった。
研究員授業 中1 外国語科	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本時までの形成的な評価が生徒に反映されていたことにより、抽出生徒が自分の学習状況を把握し 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1単位時間の学習過程として、子どもが見通しをもつための時間は必要であるが、教師が主導になり

	<p>て、学習改善の方法を選ぶことができていた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1 単位時間において、一人一人の生徒がそれぞれの課題に応じて、それぞれに合った学習方法で課題解決に取り組むことができる学習過程を示すことができた。 	<p>過ぎた部分があり、結果的に生徒が受け身になってしまった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 単元構成の工夫として、教科書の内容をもとに単元計画を作成しているが、本単元のような構成で授業をすることに対して難しさを感じる先生方も多かった。
第 19 次研究 2 年次の総括	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「単元構成の工夫」や「1 単位時間の学習過程」と関連して、学習の途中段階でのテストやアンケート（前述のミニテスト、Form、中間評価）は、児童生徒が自分の学習状況や進度を把握することにつながり、自ら学習の調整を図りながら主体的に学び進めることに効果的である。 ・ 「形成的な評価」と関連して、テストやアンケートの内容と評価規準の整合性を高めることで、教師の評価の精度を高めることにつながる。また、テストやアンケートの結果を事後の活動にどのように生かせるか、振り返り等を通して児童生徒と共有することで、テストやアンケートが児童生徒にとって必要感のある活動となる。 ・ 「単元構成の工夫」と関連して、児童生徒が学習の見通しをもち、個々に課題を設定し、自らの学習状況を把握しながら自分に合った学習方法を選択し、学ぶことができるような形を示すことができた。一方で、児童生徒にとっては上述のような学習形態が十分に身に付いていない様子も見られ、主体的に学習を進めることが難しい場面も見られた。また、教師にとってはこのような単元構成を仕組むことに難しさを感じている様子も見られる。児童生徒が主体的に学習に取り組めるようにするためにも、各教科や児童生徒の実態に応じて汎用的に活用できる学習サイクルを示していく必要がある。 	

3 研究内容 3 個別最適な学び、協働的な学び

第 19 次研究 2 年次の重点：「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」

	成 果	課 題
研究員授業 小 4 社会科	<ul style="list-style-type: none"> ・ 児童一人一人が課題意識をもって取り組めるようにしたことで、学力が中位から上位にある児童は、自分に合った学習方法や時間を考えながら学び進めることができ、資質・能力を向上させることができていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個別最適な学びと協働的な学びが、児童の資質・能力の育成にどのように結びついているのかが不明瞭であった。 ・ 個別最適な学びを充実させるために単元構成を工夫したり、児童に複数の学び方を提示したりした

		<p>が、全ての児童が自分に合った学び方を選び、活用することは難しかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・協働的な学びを通して、児童に何を語らせたり、どのような学びを深めさせたりしたかったのかが不明瞭であった。
協力校授業 中2数学科	<ul style="list-style-type: none"> ・適切な課題設定により、生徒は1単位時間の見通しをもつことができ、課題解決に向けてやるべきことを理解して粘り強く学習に取り組む姿が見られた。 ・個別の手立て（主にヒントカードの活用）が充実していたため、生徒が学習方法を選択しながら学ぶことができていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・個人思考、集団解決の場面において、各々の生徒に課題解決の進め方を任せる場面があった。時間を十分に確保することで個々に解決が進む生徒もいた一方で、活動が停滞する生徒も見られた。
協力校授業 小4算数科	<ul style="list-style-type: none"> ・児童一人一人が既習内容を生かして面積に関する問題づくりに取り組んだ。ICTの活用と関連して、アプリ（ロイロノート）上に学習の補助となるワークシートがあったので、全ての児童が学習を進めることができていた。また、面積に関連する写真を端末内に蓄積しておいたことで、面積の大きさを示したり、比較したりするような問題づくりを行う際に、効果的に活用されていた。 ・個別最適な学びの要素の一つとして自ら学習を調整するという視点が重要となる。本単元では、児童が自分の学び方を振り返ることができるようなワークシートが活用されており、効果的であった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・協働的な学びを促すために行った座席ごとに指定したペアでの活動は、相手を限定してしまい交流を妨げてしまった側面があった。 ・児童によっては、誰と、どのような視点で交流するとよいのかが、はっきりとしていない様子が見られた。
研究員授業 中1外国語科	<ul style="list-style-type: none"> ・本時で生徒が目指す英作文のモデルが、goodモデルとbadモデルで比較して提示されたことにより、生徒は自分の英作文の不足に気付 	<ul style="list-style-type: none"> ・「ヒント」を適切なタイミングで活用できていない生徒もいた。 ・書く目的（特に場面）や単元で生徒が目指す姿を、単元を通して意

	<p>くことができ、学習改善につながっていた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英作文を改善していくための視点を提示した「ヒント」が生徒と共有されていたことで、必要に応じてヒントを活用し、英作文の改善に役立てることができていた。 ・英作文を書く目的をそれぞれの生徒が設定していたことで、目的にそった表現の工夫ができていた。 ・英文を改善する視点を踏まえながら、友達と自分の英文を比較し、再考している生徒がいた。 	<p>識させ続けることが難しかった。生徒は自ら書く目的を選択してはいるが、英作文をよりよくしたいなどの情意面の高まりが見られなかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時までの形成的な評価をもとに、教師から個々の生徒に声かけを行っていたが、協働的な学びが促進されない場面も見られた。
<p>第19次研究 2年次の総括</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「個別最適な学び」と関連して、児童生徒にとって学習を進めやすくなるような環境づくり（前述のICT活用やヒントの提示など）は、児童生徒が自分に必要な学習方法や時間を考えながら学習することにつながった。一方で、「協働的な学び」と関連して、個々での学習が充実するほど、他者との関わりが希薄になりやすい傾向が見られ、協働的な学びの必要感を高めていくことに課題が残った。 ・「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」と指導計画、評価計画に関連して、今年度の授業実践では共通して以下のような計画で授業実践を行った。 <ol style="list-style-type: none"> ① 児童生徒が単元を通して到達を目指す姿を具体的にイメージする。また、自らの興味・関心等に応じて、個々に課題を設定する。 ② ①に向けて、個々に学習方法や時間を考えながら学習する。 ③ 振り返りやテスト等を通して、自分の学習状況や学び方を確認したり、改善したりする。 ④ ③をもとに、再度、個々に必要な学習方法や時間を考えながら学習し、課題解決に取り組む。 ⑤ 単元を通じた学びを振り返り、自己の成長に気付いたり、学び方を他の単元や教科に生かしたりする。 <p>このような学習の流れを活用することができた児童生徒は、単元全体を通して学びを停滞させることなく、課題解決を凶ろうと自ら学習を調整しながら他者と関わり合い、主体的に学ぶことができていた。</p> <p>一方で、上述のような学習の流れを十分に活用しきれなかった児童生徒も見られた。教師からの評価を児童生徒への指導に適切に行い、自分自身の学習状況に気付かせていくことや、各教科、単元において上述のような</p> 	

	<p>学び方を児童生徒が習得できるように取り組んでいくこと、学級経営を土台としながら、他者と交流する視点をもたせ交流しやすくなるような環境をつくっていくことなどが必要である。</p>
--	---

あとがき

当センターでは、「求められる資質・能力を育む学習指導の在り方」を研究主題に掲げ、2か年計画で第19次研究に取り組んでまいりました。

2年次となる本年度は、指導と評価の一体化を目指す学習評価として（1）目標と評価の一体化（2）指導計画・評価計画（3）個別最適な学び、協働的な学びの3つに内容についてさらに重点化を図り、理論研究と実践検証を推進してまいりました。

とりわけ、研究員所属校（旭川市立新富小学校）及び研究協力校（旭川市立北星中学校及び美瑛町立美瑛小学校）における授業公開では、参加された多くの先生方から貴重なご意見をいただき、研究理論を具体的に検証することができました。また、今年度の研修センター発表会では、研究員所属校（旭川市立愛宕中学校）において、授業を公開し、これまでの研究成果について授業を通して発信することができました。

この度、それらの成果をまとめた研究紀要第49号をWeb版で上川教育研修センターホームページより広く発信いたします。これもひとえに、北海道教育庁上川教育局並びに旭川市教育委員会の皆様の御指導・御助言、研究協力校の先生方の優れた実践、そして、研究員所属校の先生方の御支援と御協力の賜物と、心から感謝申し上げる次第です。

本紀要の内容につきましては、改善点等があると存じますが、各学校における校内研修はもとより、個人研究や日常実践等に広く活用していただくとともに、多くの皆様の御批正、御指導をいただくことができましたら幸いに存じます。

次年度は、第20次研究の1年次となります。上川管内の先生方の期待に応え、これまで以上に理論と実践を充実させた研究成果をお示しできるよう全力を尽くしてまいります。

研究事業部長 川村 貴弘

主要参考文献

- ◇学習指導要領、学習指導要領解説（平成29年告示、文部科学省）
- ◇初等教育資料、中等教育資料（文部科学省）
- ◇中央教育審議会答申（文部科学省）
- ◇「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（国立教育政策研究所）
- ◇上川教育研修センター研究紀要 第47・48号（上川教育研修センター）
- ◇小、中学校学習指導要領 総則編（平成29年告示、文部科学省）
- ◇学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料（令和3年 文部科学省初等中等教育局教育課程課）

研究協力校

旭川市立北星中学校（校長 岩瀬 一弘）
美瑛町立美瑛小学校（校長 米津 理臣）

上 川 教 育 研 修 セ ン タ ー

所 長	伊 東 義 晃	
副 所 長	石 前 聖 香	
事 務 部 長	北 澤 克 康	
研究事業部長	川 村 貴 弘	旭 川 市 立 永 山 西 小 学 校
研 究 員	近 田 泰 斗	旭 川 市 立 北 光 小 学 校
	三 上 貴 也	旭 川 市 立 中 央 中 学 校
	片 山 泉	旭 川 市 立 愛 宕 中 学 校
	因 幡 明 浩	旭 川 市 立 新 富 小 学 校
	荒 木 健 地	旭 川 市 立 北 門 中 学 校
	河 野 翼	旭 川 市 立 朝 日 小 学 校
指 導 員	平 井 佐 知	旭 川 市 立 青 雲 小 学 校
	小 林 和 博	旭 川 市 立 桜 岡 中 学 校
	野 尻 佳 世	旭 川 市 立 愛 宕 中 学 校
	久 須 美 克 典	旭 川 市 立 緑 が 丘 中 学 校
事 務 係	笹 谷 青 子	
	上 光 さ ゆ り	



本研究に関わってご助言・ご示唆いただいた指導主事の方々

北海道教育庁上川教育局教育支援課義務教育指導班	主 査	高 橋 哲 雄 様
旭川市教育委員会教育指導課	主 査	森 走 平 様

研究紀要 第49号

求められる資質・能力を育む学習指導の在り方
～指導と評価の一体化を目指す学習評価～

発行 令和6年3月31日

発行者 上川教育研修センター

旭川市 6条通4丁目

電話 (0166) 24-2501

FAX (0166) 24-2512

E-mail: kami-cen@educet.plala.or.jp